

2017年1月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 修行の拠り所

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含経典2』（ちくま学芸文庫）／実践の方法に関する経典群／預流相応／1 預流

#### (2) 主題

この経文では「釈迦牟尼世尊の教えを受けて仏・法・僧伽にたいする絶対の浄信をもち、戒の実践に励む修行者は、法の流れに入る」とされています。これについて学んでみたいと思います

### 2. 預流（よる）

#### (1) 経文

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、聖なる弟子は、四つのことを成就するとき、預流となって、もはや地獄ゆきの運命はまぬかれ、決定（けっじょう）して正覚に向うものとなる。その四つのこととは何であるか」

（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.254）

#### (2) 地獄

地獄とは地底にあると信じられていた牢獄で、ここに堕ちますと、長い期間、激しい苦痛に苛まれ続けると言われています。

悪業を重ねた人は、死後、地獄に堕ちるとされていました。

#### (3) 預流

「預流」とは「法の流れに入る」という意味です。真理に目を開いて、自燈明・法燈明の実践に入った修行者です。

#### (4) 地獄ゆきの運命はまぬかれる

これまで悪業を重ねてきたために死後は地獄ゆきに決まっていた人でも、法の流れに入れば、その運命から抜け出すことができます。

#### (5) 正覚に向かう

法の流れに入った修行者は、地獄ゆきの運命からまぬかれるだけでなく、正覚（仏の悟り）へ向かうものとなるとあります。人生の大転換がなされるわけです。

### 3. 四不壊浄

教えを学んでいる修行者が、次の四つのことを成就すれば預流となるとあります。

仏に対して絶対の浄信を成就する

法に対して絶対の浄信を成就する

僧伽に対して絶対の浄信を成就する

聖者の愛樂（あいぎょう）するもろもろの戒を成就する

これを「四不壊浄」と言います。

### 4. 絶対の浄信

「絶対の」は、ここでは「無条件に」という意味でありましょう。

「浄」は執着心・貪欲などに汚れていないことで、「真心から」ということになります。

「信」は、仏教では「信頼する」ということです。

「成就する」とは「ものごとが成し遂げられ、得たものは失わない」ということです。

そこで「絶対の浄信を成就する」は、「無条件に、真心から、信頼し続ける」となります。

### 5. 仏にたいする浄信

#### (1) 経文

「比丘たちよ、ここに聖なる弟子があって、仏にたいして絶対の浄信を成就する。いわく、かの世尊は、応供・正等覚者・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊にましますと」（同書、p.254）

#### (2) 仏の十号

仏は、数多くの異名で呼ばれています。この経文に記された十の異名は、仏の十号と呼ばれるものです。簡単にご説明しておきます。

応供（おうぐ）：供養に応じる価値がある人

正等覚者（しょうとうがくしゃ）：あらゆる存在が平等であることを正しく覚っている人

明行足（みょうぎょうそく）：智慧（明）と実行（行）が揃っている人

善逝（ぜんぜい）：迷いの世界から去った人

世間解（せけんげ）：どんな人の境遇も理解できる人

無上士（むじょうじ）：最高の人

調御丈夫（じょうごじょうぶ）：人々を正しく教え導く人

天人師（てんにんし）：天上界の神々も人間界の人々もあまねく導く人

仏（ぶつ）：真理を悟った人、ブツダ

世尊（せそん）：世の中でもっとも尊い人

## (3) 妙法蓮華經における仏の十号

妙法蓮華經では、阿含經の十号の前に「如来」が加わって十一号になっています。

私はこれを、「如来は、応供・正偏知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊である」と、読んでいます。

なお、阿含經の「正等覺者」が、ここでは「正偏知」となっています。「正偏知」とは「智慧が正しく、あまねくゆきわたっている人」という意味です。

## (4) 仏に対する絶対の淨信

「仏にたいする絶対の淨信を成就する」ことによって、次のような心になると思われま

- ① 仏を心から信頼し、慕って行く
- ② 仏の説く教えを心から信頼し、実践する
- ③ 仏を手本とし、目標として修行する

## 7. 法にたいする淨信

## (1) 經文

「また、法にたいして絶対の淨信を成就する。いわく、法は世尊によりて善く説かれた。それは現に証せられるもの、時をへだてずして果報あるもの、〈来たって見よ〉というべきもの、よく涅槃に導くものにして、かつ、智者のそれぞれ自ら知るべきものであると」（同書、p.255）

## (2) 善く説かれた

「法は世尊によりて善く説かれた」とあります。

「善く説かれた」には、「よ(善)くぞ、説いてくださった」という響きを感じられます。

## (3) 法が備えている特質

## ① 現に証せられる

「法」が「現実」と整合していることを実証できることが、「現に証せられる」ということです。

## ② 時をへだてずして果報がある

「法」を実践した果報は、その時その場に生じるということです。

この場合の果報は、法を実践した本人に生じる本質的な果報です。

法を実践したことによって、人格が向上し、ますます法を実践する力が増すという果報がそれです。

## ③ 〈来たって見よ〉というべきものである

「来たって見よ」とは、自分の目で確かめてくださいということです。

法は「現に証せられる」のであり、「時をへだてずして果報がある」のですから、見る目を持っている人であれば、自分で確かめることができるのです。

④ よく涅槃に導く

法を実践する人は、涅槃に導かれるのです。

涅槃とは、煩惱が無くなって、正覚に到った境地です。釈迦牟尼世尊の説法の目的は、ここにあります。

⑤ 智者のそれぞれ自ら知るべきものである

「智者」とは、「道理が分かる人」です。

「道理が分かる人」なら、「現に証せられること」「時をへだてずして果報があること」「よく涅槃に導くこと」を自ら観察し、体験して、悟ってくださいと言っているわけです。

妙法蓮華経方便品に説かれる、諸仏出世の一大事因縁における「開仏知見・示仏知見・悟仏知見・入仏知見道」の教えを思い出します。

8. 僧伽にたいする絶対の浄信

(1) 経文

また、僧伽にたいして絶対の浄信を成就する。いわく、世尊の弟子衆は善く行ずる者である、世尊の弟子衆は直く行ずる者である、世尊の弟子衆は正しく行ずる者である、世尊の弟子衆はうやうやしく行ずる者である。すなわち、四双八輩がそれであって、それは、尊敬に値し、尊重に値し、供養に値し、合掌に値し、世間無上の福田であると。

(2) 僧伽とは

僧伽とは、もともとは、商人や職人の組合を意味したのだそうです。

これを仏教が取り入れて、修行者がひとところに集まって協力しながら、生活し、修行している集団を、僧伽と言うようになったということです。

(3) 世尊の弟子衆

ここでいう僧伽は、釈迦牟尼世尊の弟子衆で、仏と法にたいする絶対の浄信を成就した修行者たちです。自燈明・法燈明の姿勢で修行に励んでいます。

(4) 修行者の姿

釈迦牟尼世尊のもとで修行する人々の姿が次のように述べられています。

① 世尊の弟子衆は善く行ずる者である

「善く行ずる」とあります。「善」は「真理に合っている」ことを意味します。世尊の弟子衆は真理の道を歩んでいるのです。

② 世尊の弟子衆は直く行ずる者である

「直く行ずる」とは、真っ直ぐに、正直にということです。

修行に嘘や誤魔化しが無いことを言っているのです。見た目だけ修行しているように取り繕うというようなことをしないのです。

③ 世尊の弟子衆は正しく行ずる者である

「正しい」は「中」と同じです。「正しく行ずる」とは「中道を実践する」ことです。

④ 世尊の弟子衆はうやうやしく行ずる者である。

「うやうや(恭)しい」は「尊敬の心でつつましく」という意味です。「仏」と「法」と「僧伽(修行する仲間たち)」に対して、尊敬の心でつつましい態度を保ちながら、修行を進めるのでありましょう。

(4) 四双八輩

釈迦牟尼世尊から教えを受けて修行する人々は、四双八輩と言われました。

修行の段階として四つの境地、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢が「四双」です。それぞれの境地に向かって修行する段階を「向」、その境地に達した段階を「果」と言います。「向」が四つ、「果」が四つありますから、合わせて八つの段階になります。これが八輩です。

釈迦牟尼世尊のもとで、さまざまな段階の修行者が混じりあい、互いに教え合い、助け合って修行を続けていたことが分かります。

(5) 世間無上の福田

四双八輩の修行者は、世間から見ると、尊敬に値し、尊重に値し、供養に値し、合掌に値する人々で、世間に幸せをもたらす無上の福田でした。

修行者たちは、自分の修行の成就だけを考えていたのではなく、世間に暮らす在家の人びとの幸せのためにも、教えを伝えたり、苦悩を救ったりして貢献していたことが窺われます。

この姿は、妙法蓮華經に説かれる菩薩の姿に通じるものがあると思います。

## 9. 戒を成就する

(1) 経文

また、聖者の愛樂(あいぎょう)するもろもろの戒を成就する。それは、完全にして、混りものがなく、純潔にして、曇りがなく、自由を与え、智者の讃えるところ、もはや執するところなくして、よく三昧にいたらしめる。(同書、p.255)

(2) 戒

教えを受けた修行者が、自分はこの教えを身につけようと決心します。決心した教えが戒です。

自分はこの悪をなし易いから、この悪をなさないように取り組もうと決心します。

自分はこの善ができ難いから、この善を行なうように取り組もうと決心します。

このように決心して、実践に励むのです。

(3) 戒を成就する

「戒を成就する」とは、「戒を実践し続ける」という意味です。どんな邪魔が入っても、どんな誘惑に出会っても、挫折することなく戒を実践し続けるのです。

## (4) 聖者の愛樂する戒

「聖者」とは、釈迦牟尼世尊から教えをいただいて修行する四双八輩の人々です。

「愛樂する」とありますが、ここでの「愛」は「高い理想を追求する」という意味、「樂」は「願って」という意味です。

聖者は、高い理想を求め、願って教えを実践するのです。

## (5) 戒の実践

- ① 聖者は戒を、欠けるところなく、完全に実践します。
- ② 聖者は戒を、見栄などの混りものなく実践します。
- ③ 聖者は戒を、貪欲・瞋恚・愚痴などによって汚すことなく、純潔に実践します。
- ④ 聖者は戒を、迷いとか怠け心などの曇りなく実践します。

## (6) 戒の実践の功德

- ① 戒を実践することによって自由が与えられます。

「自由」とは、本来の自分を理由とするということです。本来の自分は仏性です。

戒を実践することによって、本来の自分すなわち仏性が現れてくるのです。

- ② 戒を実践することを智者が讃えます。

智者とは、ここでは、釈迦牟尼世尊であると思います。

仏性が現れるまで戒を実践したことを、釈迦牟尼世尊が讃えてくださるのです。

- ③ 戒を実践することによって、執着心が無くなります。

戒の実践を繰り返すうちに、真理の通りに生きることが当たり前になりますから、執着心は消滅してしまいます。すなわち、阿羅漢の境地にいたることができます。

- ④ 戒の実践を繰り返すことによって、三昧にいたるとあります。心も行ないも真理に定まることを言っていると思います。聖なる八支の道における「正定」の境地に入るわけです。

## 10. 励ましの偈

## (1) 経文

「比丘たちよ、聖なる弟子は、この四つのことを成就するとき、預流となって、もはや地獄ゆきの運命をまぬかれ、決定して正覚に向うものとなるのである」

そのように世尊は説きたもうた。

そのように説きたもうて、善逝は、また師として仰せられた。

「人もし信あり、戒ありて

法を觀じて揺がざれば

やがては安樂にあふれたる

至福の境にいたるべし」(同書、p. 255~256)

## (2) 偈の言葉の意味

人：修行者を指します

信：仏・法・僧伽に対する絶対の浄信を成就することです

戒：聖者の愛樂する戒を成就することです

観じる：法を全身全霊で受け取ることです

揺るぎない：法を実践して迫害や誘惑に出会っても決して法から外れないことです

安樂にあふれる：「安樂」とは「安らかな心で自ら願って」という意味で、主体的に法を実践することです。あふれるほどに法の実践をしているわけです。

至福の境：法のままに生きる自由自在の境地はまさに至福の境です

## (3) 釈迦牟尼世尊の励まし

締めくくりに、釈迦牟尼世尊は、偈を説いて修行者たちを励まします。

修行者が、自燈明・法燈明の精神で法を学び実践し続ければ、涅槃の境地に達することが、ここにうたわれています。